

かねてからこの事態のくることは覚悟していて準備をしていたが、追われるようになって出てゆくことには、やはり悔しさと寂しさとが交差して、複雑な気持ちであった。

朝鮮人部落から雇った牛車五台に布団や当座必要な衣類、それに食料品、最低限必要な家財道具を積んで、咸興府内軍営通りにある平松京染店の二階一間に間借りすることとなった。今までの比較的ゆったりした官舎の生活から、両親、兄弟が一部屋に詰め込まれる窮屈な生活が始まった。

昭和二十一年六月に日本に引揚げるまでの間、国家という後盾を失った亡国の民の暮らしが、いかに悲惨であり、いかに屈辱に満ちたものであったか、それは全く筆舌に尽くし難いものである。願わくば、未来永劫、戦争という悪魔をこの世から駆逐し、平和の傘が全世界を覆うようになってもらいたいものだ。

## 青春の追憶

茨城県 田谷榮 近

### 一 生い立ちから終戦まで

#### 生い立ち

父は、東京で電球を作る零細な町工場で働いていたが、私が二歳半のときに亡くなった。母は実家に戻り、私は茨城の祖父母に預けられたが、一年後には母は再婚してしまった。祖父は土木作業員の監督をしていて、祖母は小さな駄菓子屋を開いて果物や野菜も商っていた。

昭和九（一九三四）年に地元の小学校に入学したが、三年生の一学期までは目立たない存在であった。二学期になって、横須賀海兵団を短期現役で除隊した木村正一訓導が赴任してきて、私たちの組の担任となった。

当時の世情は不景気のどん底で貧富の差が甚だしかったが、木村訓導はどの児童にも公平に接し

ていて依怙臆負がなく、そのためだれもが学校好きになっていった。私もその一人で、学術優秀皆勤賞を受けていて四年生から六年生まで級長、副級長で通した。六年生を卒業するに際しては、中学校に進学できるような家の経済状態ではなかった

が、担任教師の祖父母に対する説得が功を奏して、茨城県立麻生中学校に入学することができた。中学校は家から歩いて十分ぐらいの距離にあった。入学した昭和十五年は、ちょうど皇紀二千六百年という節目の年で、いろいろと祝賀行事の多い年であった。翌年の十一月八日には、アメリカ、イギリスに対して国交断絶し、宣戦を布告した。

これからの日本は戦争の泥沼に入ってしまった。中学校でも、敵性語である英語の授業廃止の声が満ちあふれてきた。黒板に、生徒のだけれかが「英語廃止」と大書したが、それを見た英語担任の永井正巳教諭が、その脇に「敵を知り、己を知らば百戦危うからず」と書き加え、英語の勉強の必要性を諄々と論じた言葉は、強く私の胸に響いた。

昭和十八年五月、私が四年生のときに祖父が死んだ。私は退学を考えたが、祖母が承知しなかった。

私は心の中では、できることならば高等学校から帝大に進みたいと願っていた。そんなときに、東京で裕福な家庭の後妻に入った母が子供に恵まれず、私に会いたがっていることを風の便りに聞いた。私は母に学資を出してもらおうことを考えて、母との接触をする方法を考えるようになった。

そのころ、文部省から高等学校文科の入学試験の課目から英語が外されて、それに代わって数学が加えられるという発表があった。さらに昭和十九年度には、学徒動員令が施行されて、大学高専はもとより中学生や女生生までも学業を抛（なげ）って軍需工場などに動員されて、軍需物資や武器弾薬の生産に従事することになった。

昭和二十年三月には、中等学校の修業年限の繰り上げ措置によって、五年生と四年生が一緒に卒業することになった。

私はそのような事態においても、上級学校への進学を望んで「上級学校受験案内書」を読んでいたが、そこで満州国立大学哈爾濱学院の存在を知った。その案内書によると、学費免除だけでなく、生活も一切が国費で賄われるとのことで、学科ではロシア語が義務づけられているが、それ以外はすべて日本語で行うとのことだった。

満州国の学校なので学徒動員令とは無関係で、受験資格も幸いなことに中学四年修了程度で、受験科目は英語、歴史、国語（作文）であった。

私はここを受験することに決心し、昭和十九年一月に東京の慶應義塾大学医学部で入学試験を受けた。二月下旬、幸運にも合格通知が届き、私は渡満に反対する祖母を説得した。原語で、トルストイやツルゲーネフが読めるようになるという思いが、私を有頂天にした。

#### 渡満

昭和十九年四月十五日、私は晴れて、満州国立大学哈爾濱学院本科第一学年生として入学式に臨

やがて四年制だった学院も三年制になり、三年生は二年半の在学の後に卒業することとなり、昭和二十年の春からは全学年生が同一寮で起居するようになった。

さて、私たち昭和十九年入学の一年生百人は、二年生の室長のもとに午前六時起床、七時朝食、八時集団登校、八時半から十二時半まで四時間授業、そのうち二時間がロシア人講師によるロシア語会話、二時間が日本人講師による授業であった。一クラスは二十五人で四クラスに分かれていた。昼食は、上級生のいる南寮でとった。南寮は、学校から歩いて十分ぐらいの所だった。

午後の二時間の授業が終わると、ラグビーや剣道などの部活動があったが、いずれも強制的でなく、各人は自由に活動し寮に戻れた。冬季にはスケート部もあった。寮に戻ると、夕食までは図書館や自習室で学習する者も多かったが、これも強制ではなかった。寮監は、日本人の教授や助教が一週間交代で任じていた。

んだ。昭和三年三月二十七日生まれの私は早生まれなので、満十六歳と二十一日で大学生になった。百人の同期生の中の最年少者であった。

月曜日から土曜日まで、午前中の四時間はロシア人の講師と日本人の教授・助教によるロシア語の授業で、週二十四時間がロシア語の講読、作文、文法、会話に充てられていた。月曜日から金曜日までの午後の二時間が日本帝国憲法、経済、日本国民法、そして院長と学監の講話の時間に充てられていた。満州国立大学であっても、憲法学のそれは満州国憲法ではなかった。他に剣道と軍事教練が一時間ずつあった。

学生は百人で、日本人学生が九十人、残る十人は中国人、朝鮮人、モンゴル人で全員寮生活であったが、一年生は二、三、四年生とは別に起居した。各部屋には、二年生が室長として一人ずつ配置されていた。これは、自由主義的傾向の強い上級生の影響を排除するための苦肉の策とのうわさもあったが、真偽のほどは定かでない。

八月一日から三十一日までは、夏期休暇でそれぞれ思い思いの行動をとっていた。私は、北朝鮮の咸鏡南道で朝鮮人小学校の校長をしていた叔父を尋ねて、ひと夏をいとこたちとのんびり過ごした。面長（村長のこと）の家を訪問したこともあったが、校長の甥ということで破格の待遇を受けたこともしばしばあった。

私と血のつながる叔母は、朝鮮語が巧みであったので、面の有志夫人たちと親しくしていた。あとで聞いたことだが、日本人の校長先生の妻が、日本語を使わないで、朝鮮語で親しく会話を交わしていることは、当時としては好ましいことではなかったようだ。

九月も近くなり、哈爾濱に戻るべく急行列車の停まる駅に切符を買いに行った。来るときには簡単に買った切符が、戻るときにはなかなか買えなかった。切符販売の朝鮮人駅員が、長いこと京城の鉄道管理局と電話で話し合い、やっと半ば黙認という形で哈爾濱までの長距離切符を発売してく

れた。私は厚く礼を述べて、やっと車中の人となつた。

二学期に入って間もなくのこと、寮の自習室にいと、週番の室長から面会者が来ていることを告げられた。訝しかったが寮監室に行くと、その週の寮監である憲法学のW教授と、日焼けした丸顔でがっちりした体の青年が対座していた。私が室に入ると、W教授がすぐに「こちらは東亜同文書院のM君だ。君への紹介状を持参している。満州の、少数民族をテーマにした卒論を書くために来られた。この寮に一泊したいとのことであるが、規則によって部外者を泊めることはできないので、特別に許可するから、君が外出して適当な旅館を探してあげなさい。九時までに帰寮しなさい」と言われた。

Mと名乗る青年は、立ち上がって私に握手を求めた後、白い封筒を渡してくれた。その封筒は、麻生中学校を卒業して東亜同文書院に入学した岡見信彦氏からの手紙で、何かと便宜を図ってくれ

ヤマ姿のW教授が出てきて、私を寮監室に引きずり込み、ものも言わずに直立不動の私に十数回の往復ビンタを食らわせた。よろけて倒れた私に低い声でひと言、「帰れ！」と言って寝室に入ってしまった。顔が腫れあがった私は、三日間欠席して呻吟した。

室長の河野博行さんが、あまりにもひどい仕打ちなので抗議に行くと言うのを、「遅れた僕が悪かったのです」と言って、泣いて抗議を思いとどまらせた。

後年、同窓会誌にW教授の名前を出さないでこのことを寄稿したが、没になった。教務部長をしていたK教授（後に愛知大学教授）から、「だれに往復ビンタを食らわせられたのか」と尋ねられた。教授はW教授ではなく、別人のあるロシア語の教授ではないかと考えていたようだ。その教授は、私の学力向上を激賞した。

#### 終戦

昭和二十年三月末、第二学年への進級者四十人

という内容であった。

時計は午後四時を少し過ぎていたが、哈爾濱に来てまだ半年しか経っていないので、名所旧跡を充分に案内することはできなかった。それでも、ロシア正教の中央寺院や松花江を案内してから、ロシア料理店でワインを飲み、ピフテキを食べた。食事はM氏が全額負担してくれた。宿舎は大和ホテルを予約したので、午後七時にチェックインした。

M氏は、潮来町（現在の潮来市）出身で、利根川の対岸の佐原中学（現在の佐原高校）の卒業生であった。戦後は、横浜国立大学経済学部長も務めた。また、岡見氏は鹿島町（現在の鹿島市）出身で、引揚げ後に東京大学に入り、神奈川県立の一流高校の校長を歴任した。

そこで少し雑談をして、午後八時にはホテルを出たが、道に迷ってしまい、松花江に戻ったり高粱畑に紛れ込んだりして、帰寮した時には午後十一時になろうとしていた。玄関をたたくと、パジの氏名が発表されたが、幸いに私もその中にいた。残りの六十人は、仮進級、保留、原級留置にそれぞれ分けられた。

第二学年に進級したものの、体に異常を来たして、毎日だるい脚を引きずって歩かねばならなくなってしまう。哈爾濱市立病院へ行ったら、脚氣と診断された。そのことを北朝鮮咸鏡南道にいる叔父に知らせると、「休学してすぐにこっちに来るように」との返事が届いた。私立病院の診断書を添えて、八月三十一日までの休学願いを提出し受理された。

哈爾濱を発つにあたって、デパート「チュウリン」で、トランプ二組、哈爾濱の絵葉書二組と馬鈴薯飴を十袋、そしてハンカチを一ダース買い求めた。切符はたやすく入手できた。三日間の汽車の旅のあと急行列車から降り立ち、昨年哈爾濱までの長距離切符を手配してくれた切符販売主任を訪ね、その際のお礼を述べた後、チュウリンで買いかけて持参していた物の半分を渡そうとした。

固辞する彼に無理矢理受け取ってもらったときは、数カ月後に彼が命の恩人になろうとは夢想だにしなかった。

叔父は左遷されて、郡の中心の邑（町）から三キロメートルの面から、二十キロメートルも離れた山の中の面の小学校校長になっていた。そこは電気も通らず電話もなく、新聞は一週間分まとめて配達された。全校児童数も五十人で、教師は校長を含めて三人であった。自転車が唯一の交通手段で、自転車を持っていく家は五軒に一軒ほどで、郡の中心邑に行くのに、大多数の人々は徒歩によるしかなかった。

日本人は、叔父の家族と新婚の駐在所の巡查夫妻だけであった。相互の訪問もなく、叔母は面長夫人などと交際していた。

初夏になると山々は緑に萌え、閑古鳥が鳴き、溪流には鮎が躍った。私は朝露を踏んで小川の畔を散策し、美しい空気を胸いっぱい吸った。

私の仕事はランプの火屋の掃除だったが、不慣

かまひす  
喧しかった。

## 二 終戦から帰国まで

銃殺を免れて

村人たちは寛大だった。叔父は若者たちに夜間学校を開放し、叔母は巧みな朝鮮語を操り、決して尊大でなかった。従弟は学校内でたった一人の日本人児童で、休み時間も放課後も、朝鮮語しか喋らなかった。

新婚の巡查夫妻は四月に転任してきたばかりで、村人たちを駐在所へ引き立てたり、検挙したりしたことは皆無であった。新たに成立した人民委員会の事務所として駐在所を明け渡し、巡查夫妻は校長官舎に移ってきた。本署へ連絡に行くという巡查を、人民委員会が止めた「署長以下全員が逮捕されました。同胞を拷問して殺した特高警察官が虐殺されたそうです。警察手帳を私によこさない。あなたは今日からただの民間人です」

委員長は渋る巡查から警察手帳を取り上げて、それまで駐在所に保護されていた犯罪者記録簿を

れのため、よく割っては破片をかき集めるのだった。たまたま訪れてきた行商の朝鮮婦人に火屋の掃除の仕方を教わったが、それからは割らなくなった。七月に入ると、棚田には螢の群れが、まるで夜空を彩る大輪の花火のように光り、壮観というほかに表現の方法がなかった。小学四年生の従弟と手を握って、言葉もなく立ち尽くしたものであった。

官舎には、毎晩若い男女の話し声や、胸に染み込むような哀調を帯びた歌声が聞こえていた。「視学からは無闇矢鱈に貸すなど言われているのだが、俺は聞かなかったことにしている」と叔父が言っていた。八月十五日は平穩に過ぎた。いつものように朝食が済むと、叔父は学校へ出掛けた。官舎から学校までは、三段跳びで行けるほどの距離だった。

叔父は出掛けたと思ったら、青い顔をして帰って来て、ひと言ぼつんと言った。「戦が終わった。無条件降伏だ！」翌日の八月十六日は蟬時雨が

燃やしている火の中に投げこんだ。

八月十五日から一週間が経った。日本人は郡の中心地にある日本人小学校へ、一週間分の食糧と若干の衣料品を持って収容されるといふニュースが入ってきた。両家族は、人民委員会が提案してくれたそれぞれの牛車一台に乗せた家財道具のほかは、委員会に寄付して、村民に見送られて日本人が収容されている郡の小学校へ向かった。何人もの朝鮮人の婦人が、叔母と手を取り合っ泣いて別れを惜しんでいた。こっそりと、餞別の包みを叔母に手渡す婦人もいた。

定員二百人の小学校の建物に、一千人もの日本人が収容されたのだから、その混雑ぶりは筆舌に尽くし難かった。喧嘩、盗難の連続であった。便所は瞬く間に汚物で埋まり、使用不能になった。炊事は、各家庭ごとに思い思いに校庭でするほかに方法がなかった。

人民委員会の約束した一週間が過ぎ、九月に入っても拘束は解かれなかった。各家庭からの食糧

や衣類の持ち出しも黙認された。

中旬に入って、帰国の許可が出されたが、各家庭に残された家財道具の一切は接収された。五両ずつの有蓋と無蓋の貨車が用意された。が、次の急行列車の停車する駅に着くと、全車両が引込線に入れられた。警察に代わって誕生した保安隊が、脱走兵や元憲兵や警察官が、民間人になりすましているのを調べると称して、青壮男性の訊問を始めた。保安隊員は一時預かると称して、時計や万年筆、宝石類を提出させた。リュックサックや風呂敷包みを開けさせて、預り証も出さないうで取り上げた。新しい生命も誕生したが、死人も出た。雨も降った。無蓋車の人々は毛布をテント代わりにしたが、すぐにびしょ濡れになってしまった。

さらに一週間ぐらい経って、引揚者団の団長が私の所へ来た。「このまま強奪されていてはいつ帰国できるのか、全く困ったことだ。駅にはソ連兵が三人ほどいるが、あなたに彼らを動かしてもらうように保安隊にかけ合ってもらいたいのです

が？」と話を打ちかけてきた傍から叔父が口を挟んだ。「あの兵隊たちは、三十八度線まで列車で運ぶ武器の途中監視が役目で、何の権限もありませんよ！」団長は「それは私も分かっている。でも溺れる者は藁をも掴むというじゃありませんか。

私がロシア語を知っていれば、自分で頼むんだが」と言った。私は、叔父からロシア語を知っているふりをすると言われていたが、団長がどこから聞き込んできたのか分からなかった。「駄目で元々ですから頼みますよ」団長が哀願するように頭を下げた。「ロシア語を喋ったらひどい目に遭うぞ」と叔父は再度私に警告した。

団長と一人のロシア兵と私は、駅長室へ出向いた。駅長の椅子には保安隊長がふんぞり返り、傍らに駅長が小さく控えていた。

ソ連兵は日本人を早く出発させるように言い、私はその言葉を通訳した。保安隊長は、元憲兵や警察官が自首すれば即刻南下させると答えた。

その晩に、無蓋車の中にいた私にかの切符販売

主任が「私について来るように」と目で合図をした。彼のあとについて大きな倉庫の陰に行くと、周囲を見回して人影のないのを確かめて小声で言った。「保安隊長が、部下に今夜十二時にあなたを呼び出して銃殺しろと命令していました。逃げるのです。十時のサイレンが鳴ったら私の家に来てください」彼は私に彼の家までの略図を渡すと、足早に立ち去った。私の頭の中は真っ白になり、足が震えた。叔父の警告が的中したのだ。

私は叔父と叔母を物陰に呼び出し、手短かに事情を説明した。叔母はすぐに取って返して黒のズボンとジャンパーを持って来た。ズボンの縫い目に、十円札が十枚隠してあると言った。「保安隊が来たら『いつもあちらこちらと泊まり歩いている』と言ってください」私は二人と話してから、収容所で親しくなった中学生のいる無蓋車を訪ねた。

彼との会話はうわの空で、十時の外出禁止のサイレンが鳴るのを待ち兼ねて彼の許を辞去した。略図は、何度も確かめて頭に刻みこまれていた。駅

の裏の駅員官舎の前に立つと、すぐに玄関が開いて駅員が目顔で私を招き入れた。そして、「十時から街中の巡察を始めて、十二時に保安隊に戻ったら、すぐにあなたを呼びに行くでしょう。十二時になったらあなたはここを出るのです」と、彼は略図を描いた。「鉄橋には両端に小屋があって、保安隊が一人ずつ警備しています。ですから少し両側にある橋を渡りなさい。外出禁止ですから、だれも通りません。向こう側へ着けば、あなたは安全です。リンチはここでしか通用しませんから」と言った。

それからも彼はいろいろなことを話したが、覚えていたのは、三人いる息子たちはみな遊び疲れて眠ってしまったことと、私が持参したトランプを宝物のようにしているということだけである。彼の妻が台所で忙しく立ち働いていたが、それは私のための脱走後の食べ物作りであった。

十二時になった。私は立ち上がって頭を下げた。「お元気で」と、彼は強く私の右手を握った。「私

も有り難うございました」と言葉に出して礼を言ったが、心の中では万が一、捕まることがあっても、私は決してあなたのことは言いませんと心の中で叫んだ。

空には、旧暦八月十三夜の皓皓たる月光が、地面に私の影法師を作っていた。空はあくまでも青く、一点の雲もなかった。

#### ソ連軍野戦病院での出来事

咸鏡南道の政治経済の中心地、咸興市には北からの日本人難民四万五千人が流入し、悲惨な生活を余儀なくされていた。栄養失調と不潔な生活のため、十月に入ると発疹チフスが流行して、死ぬ難民が増えてきた。

フランス人が経営していた済患病院が日本陸軍の病院になり、そしてソ連軍の野戦病院に変わり、そこへ難民の発疹チフス患者を収容することになった。日本人世話会から医師、看護婦、炊事夫(婦)、雑役夫(婦)、そして私が通訳として派遣された。終戦直後の混乱期に施設、設備が略奪され、ペ

とされていた。終戦時には三万人の労働者が働いていたという。工場長室でペトロフ少佐は言った。「日本人難民の発疹チフス患者を私の野戦病院で治療することになった。ついでには病院全部にスチームを通したので、各口径のパイプをトラック一台分欲しいのだが、よかつたら明日技術者を連れて受け取りにきたい」と申し入れたが、ここでも「保安部長の許可証を見せてください」と工場長が言ったが、ペトロフ少佐は、「そんな物は持っていない。私は平壤の総司令部のロマニエンコ中将の直々の訓令が第一九八〇四野戦病院院長宛に発せられたから、ここへ来たのだ！」と言って工場長を睨みつけた。「分かりました。必要なものは何でも結構ですから、持っていて下さい」工場長の顔は青ざめていた。次いで、ペトロフ少佐は市の中心街で独立街と改名されていた、旧軍営通りの日本人世話会に立ち寄った。ペトロフ少佐は、応待に出た副委員長の四谷賢治氏に言った。

「全病棟にスチームを通す。一切の資材は窒素

トロフ軍医少佐ほかのソ連軍の軍医や衛生兵が到着しても、病院としては全く機能していなかった。ペトロフ少佐は、私を通訳として連れて咸興刑務所に行き、所長に面会して「獄衣を五百人分貸与願いたい」と申し入れた。所長が「保安部長か衛戍司令官の許可証を見せてください」と尋ねると、ペトロフ少佐は「ない。緊急事態なのだ。日本人難民の間に発疹チフスが発生し猖獗を極めている。このままにしておけば、すぐに朝鮮人の間にも伝染する。元の日本陸軍病院が、我が軍の野戦病院に指定された。行って見たが荒らされて何も無い。私が一切の責任を持ち、受領証を書く。できれば毛布、布団、枕も貸与願いたい」と語気を強めてテーブルをたたき、早口でまくしたてた。しやくれ顔の眼光の鋭い風貌と、低い押しつぶした声に恐れをなしたのか、一も二もなく所長は承諾した。ペトロフ少佐が次に向かったのは八キロメートル離れた興南市の窒素工場であった。いわゆるコンビナートで、作らない物は鳥の乳だけだ

工場から出してもらったことにした。私の所にはスチームを通すパイプの口径や、その他の必要部品に詳しい者はいないから、技術者の派遣を頼む」たまたま居合わせた咸興鉄道局の機関区長の沼田保夫氏が、その仕事を買って出た。夜を日に継ぐ突貫工事で、発疹チフス患者の受け入れが始まったのは、一週間後の十一月二十日であった。

トラックで運ばれてきた病人は、男も女も裸にされて、浴室で頭髮と陰毛、脇毛を剃られて、赤や青の獄衣を着せられて病室へ運ばれた。ベッドは取り払われて、床に敷いた布団の上に寝かせられ、食事は重湯のみで、薬はカンフル注射だけだった。病人が着ていた衣類はすべてデゾカメラという消毒車で熱気消毒されたあと、それぞれ名札をつけて倉庫に格納した。

無い無い尽くして開設された病院だけに、ペトロフ少佐と私の仕事は物資の調達であった。東に薪があると聞けばトラックを飛ばし、西に石炭があると聞けば、ときを移さずにトラックでの乗り

つける日々の連続であった。あるときに、「お前は私が総司令官ロマニエンコ中将の名前を出すたびに、朝鮮の役人たちが一も二もなく物をよこすのを見てきて、私を傲慢な人間だと思っているだろう」とペトロフ少佐が私に言ったことがあったが、私は黙っていた。「衛戍司令部へ上申して、許可が下りるのを待っていたら、何も始まらないうちに終わってしまう。それが、我が国の官僚主義だ。私は私のやり方でやるしかないのだ！」と言った。ペトロフ少佐の目には、一抹の不安の影が走ったように私は感じた。

物資の調達も一段落したころ、ペトロフ少佐は平壤へ出張した。その不在中に、日本人世話会の委員長秘書の塩川勲夫氏が私を訪ねてきて、「折り返してのお願いだ、ある女性をそのまま入院させてもらえまいか。君から院長に頼んでもらいたいのだが」と頼み込んできた。

要するに、発疹チフスにかかったある女性を、そのまま頭髪も陰毛も剃らずに入院させてくれと

当てていたベーレンス少佐が、目顔で私に彼が発疹チフスに感染していることを告げた。ペトロフ少佐はあえぎあえぎ「日本の神は、信仰心の厚い者の願い事を聞いてくれるそうだ。お前すまんが、私のために祈ってくれないか」と彼は私の手を握りしめて言った。私は、彼の目を見詰めながら大粒の涙がほほを伝わってきた。

ベーレンス少佐はカンフル剤とビタミン剤を注射した。食事は全然受けつけなかった。ベーレンス少佐と私は、彼の官舎から一步も出なかった。三日後、彼は私たち二人に見守られて死んだ。ベーレンス少佐は死因を心臓衰弱と断定した。

ミーチン中尉に続いて院長も殉職した。日本人は、医師も看護婦もみな深い悲しみに包まれた。だが、衛生兵の中には祝宴を張る者たちもいた。ペトロフは信賞必罰の人であった。日本人の美人看護婦の、胸や腰に触ったアミーロフ軍医大尉は、兵士に降格されて追放された。真夜中に看護婦たちの寝室に闖入した、スタッフエフ軍曹やその

いうことであった。「院長は出張中だから、副院長のベーレンス少佐に聞いてみます」と私は答えた。ベーレンス少佐は難しいことは尋ねずに、承知したと言って、「特別扱いだから小部屋の四人を大部屋へ移し、専任の看護婦をつけるように」と指示した。私はベーレンス少佐の言葉をそのまま塩川勲夫氏に伝えた。

翌朝には、二十五歳の軍医ミーチン中尉が死んだ。やはり発疹チフスに感染して、三日後にあつけなく死んでしまった。

十日ほど経って、ペトロフ少佐が出張から帰って来たが、私は彼が随分憔悴しているように見えた。それでも、彼は平常通り私を連れて各病室を点検した。ベーレンス少佐から報告があったのか、彼は特別扱いの女性が入っている小部屋は通過した。

翌朝ペトロフ少佐は姿を現さなかった。ベーレンス少佐と私は、彼の官舎へ行った。彼の顔中には赤い斑点が浮いていた。胸をはだけて聴診器を

他数人の衛生兵は、衛戍監獄に送られた。ペリコフ経理中尉の公金横領を摘発したヤクーシキン曹長は、経理中尉に昇任して病院の経理責任者になった。

ペトロフ少佐の死後一週間ほど経って、後任の院長スミルノフ軍医少佐が着任した。日本人医師たちはベーレンス副院長が昇格になると思っていた。彼がユダヤ人であることが、日本人の常識を覆した。

スミルノフ少佐は、一日の大半を事務室で過ごしていた。彼は、乃木希典大将のことを乃木將軍とは呼ばずに、乃木男爵と敬意をこめて言っていた。二人の息子を、最前線に送り戦死させたことに対する賛嘆の言葉を、しばしば口にしていた。

私のいる場所は病院にはなくなり、日本人世話会本部へ呼び戻された。ときは二月、発疹チフス患者は数は少なくなったが、まだ病院に収容されていた。ベーレンス少佐が依然として陣頭指揮をとり、通訳には同じ哈爾濱学院の一年生であった

寫末稔君がその任に当たっていた。私と同じで彼も病を得て、昭和二十年六月に休学して、清津の自宅で静養中に八月九日のソ連軍参戦となり、そのまま難民になった。咸興までの逃避行中に父と義兄が拉致され、二家族の責任者となって、疲労困憊しているときに、私と邂逅かいこうしたのであった。

留置場から刑務所まで

日本人世話会本部に戻ってからの私の主な仕事は、委員長の兵藤金蔵氏と一緒に衛戍司令部へ行き、司令官のヤゴダ大佐に、難民に対する食糧の増配と、引揚げ開始を懇請することが主なことであった。ヤゴダ司令官の回答は毎回決まっていた、「平壤の訓令待ち」であった。

日本人世話会では昭和二十一年の一月初旬にヤゴダ司令官の許可を得て、独立街に続く開放街、(旧朝日町)に世話会直営の商店街を作り、元からの咸興在住者一万一千人から、略奪や接収から免れた物品の寄付を受けて開業していた。売上の益金は、難民の救済事業に充てられた。後日に外

私一人らしく、周りの留置人から豚箱入りの訳を根掘り葉掘り聞かれた。

そこで「金通訳は、十五歳のときに国境の新阿山から豆満江を結氷期に越境して、十年間ウラジオストックで働いていたようだ。また戻って来て、清津の割烹料理店で住み込みのコックをしていたが、そこで日本の陸海軍の将校や特務機関員の情報を、ソ連に報告していたらしいぞ。賄賂が大好きだという評判だ」という話を、阿片の密売で捕まったという中年の男から聞いた。賄賂などとは、思いもつかないことであった。

二週間後に、イワノフ中尉の取り調べを受けた。その取り調べの中で、三月十日に済患病院の日本人炊事夫数人が、患者用の白米三俵を密かに持ち出して市場で売っていて、保安隊に逮捕されたということを知らされたが、二月に病院を去った私には、全くあずかり知らないことであった。尋問で私は「東洋三国では数の単位は一、十、百、千、万、十万、百万であるが、西欧では一、十、百、

務相に提出された北朝鮮戦災者委員会本部の「北朝鮮戦災現地報告書」によれば、九十二万一千円の事業収入をあげている。ちなみに、昭和二十年九月の白米一升の値段は九円で、それから徐々に高騰し、一年後の翌年九月には六十円になった。一般労働者の賃金も、十円から七十円になっている。

ある日、兵藤金蔵委員長が四万人の日本人に白米の増配を懇請したとき、私は誤って四十万人と言ってしまった。脇にいた朝鮮人の金通訳が大声で叫んで、「大佐殿、田谷は大嘘つきだ。白米を騙し取って、市場で売るつもりなんです」と言った。それを聞いたヤゴダ大佐は、さらに大きな声を出して「投獄しろ。嘘つきめが!」と副官に命令した。副官は私に手錠をかけた。

私は二人の衛兵に銃を突き付けられ、三十分ほど歩いて咸興保安署に連行された。取り調べもなのまま、留置場に入れられた。五、六部屋ほどあった留置場は、どこも超満員であった。日本人は

千の次に百万がくる。一万は十と千、十万は百と千と数えるのが普通で、そこが間違いの生じ易い点である」ということを説明した。イワノフ中尉は納得して、すぐに私を釈放してくれた。

留置場生活中に強く脳裏に焼き付いたことは二十代の中肉中背の青年が、手錠をかけられたまま昂然と立っていた姿であった。私は、彼の背後に計り知れない独特の雰囲気を感じた。彼は、当然詐欺や窃盗などの容疑者ではないと思った。

司令部詣では寫末稔君に委せて、難民の引揚業務に携わることになった。昭和二十一年四月には、ソ連軍司令部と保安部(道庁)が列車による南下を黙認するようになった。私は、一緒に済患病院を辞めた、咸興専門学校二年生の谷潤治君とペアを組んだ。五百人から千人までの引揚者団の南下輸送の司令部員として働いた。列車を、できるだけ北緯三十八度線近くまで運行させることが、任務であった。元山駅の次の安辺駅で電気機関車と入れ替わるが、その短い時間に難民たちは小用を



足したり、虱を潰したりしていた。

輸送業務で働いているとき、私は不意に名前を呼ばれて立ち止まると、そこに妙齢の美人が立っていた。彼女は「済恵病院でお世話になった」ということを話し出したが、するとすぐに屈強な青年たちが十人ほど駆け寄って、私の前に立ち塞がった。あつという間の出来事であった。

咸興へ戻って日本人世話会の塩川勲夫氏にそのことを話したら、「彼女は人身御供だよ」と言っただけで話を続けた。塩川氏の言うところによれば、彼女は独立闘争の大物の愛人にさせられた、咸興市在住の、二十歳の商家の一人娘であった。以前、ペトロフ少佐の不在時に塩川氏からある女性をそのまま入院させてもらいたい。君から院長に頼んでもらいたい、と頼み込んできたので、副院長のペーレンス少佐に話して特別扱いとして小部屋に入れた女性だった。頭髮も陰毛も剃らせなかったわけが分かった。さらに塩川氏は続けて、「ヤゴダ大佐の指令でも、保安部はサボることだってできる

た。興南市の窒素工場での通訳をしたときのことである。

当時、日本人技術者の間では「朝鮮建国に協力しよう」という意見と「一日も早く日本に帰って、祖国再建のために働こう」という意見が対立している、後者が幾分優勢になっていた。交渉は午前十時に開始した。技術将校シャロフ中佐に対し、市瀬年男他四人の代表と私が向かい合った。朝鮮側は、オブザーバーとして鄭濂守支配人の秘書と、その通訳の二人が出席した。交渉というよりは、「帰してくれ」「帰せぬ」の押し問答が、昼食なしで延々と午後六時過ぎまで続いた。根負けしたシャロフ中佐が「あと三カ月だけ働いて欲しい」と言った。すかさず市瀬年男が「念書を書き下さい」と叫んだ。その言葉を通訳したときのシャロフ中佐の驚愕の表情を、私は六十年後の今も忘れない。

「今日は遅いから、一週間後に渡す」とシャロフ中佐は喘ぎながら言った。

翌々日の八月九日の早朝、私は保安部係長李某

はずだ。それを、一日に白米五合も難民に無料で配つたり、平康や福溪まで難民を輸送したりするようになったのは、彼女のお陰なんだ」と話し始めた。さらに続けて、「その屈強な青年たちは、みんなこちらの人間だ。恐らく、三十八度線の向こうまで護送したのだろう」私は黙って塩川勲夫氏の苦渋に満ちた顔を見詰めて話を聞いた。

引揚業務のない日は、私は咸興を離れて通訳の仕事をした。鉄道関係の仕事に従事する技師と、朝鮮人通訳の相互不信から、私に通訳を頼んできた。ソ連軍の将校に賃上げを要求する話が殆どであった。だが難しい話ばかりではなかった。六月上旬に、朝鮮共産党員、松村義士男氏、世話会渉外部長の長屋俊雄氏と一緒に訪ねた、咸興北道の城津市の高周波工場は唯一の例外で、ソ連軍技術将校アパトフ少佐の指揮の下で、日朝両技術者が和気藹々あいきあいに生産活動に従事していた。これを見て、何かしら心が和んできた。

やがて私にとつての運命の日、八月七日を迎え

の車で咸興刑務所へ連行された。逮捕令状もなく未決囚として収容され、一回の取り調べもないままに十一月二十日まで投獄された。この百十日間、私は「イーシプチルパン(二十七番)」と呼ばれていた。刑務所の未決囚棟は超満員で、どの房も定員十人なのに倍近い人数が犇むしめいていた。窃盗、強盗、放火、婦女暴行、阿片密売などの容疑者のほかに、金日成を誹謗して密告された者や、上官を侮辱した保安隊員、そして驚くことに留置場で昂然と立っていて、その背後に私がオーラを感じたあの青年も、同じ房にいた。収容中に知ったが彼は朱奉勲という二十五歳の民族主義者であった。多くの未決囚が入れ替わる中で、彼と私は牢名主的な存在であった。彼は人望家で房内での揉事の仲裁者であり、私は彼の庇護のもとで「いじめ」を免れた。

しかし、看守の中には、点呼の返事の仕方が悪いとか何とか難癖をつけては、コンクリートの廊下に静座させて、殴る蹴るの暴力を加える者もい

「豊丸」に乗船した。

帰国してから

栄豊丸では、四千六百七十三人の引揚者のうち一人が天然痘で死亡し、元軍人二十人が栄養失調で死亡し水葬された。仮痘十五人が発生したため佐世保港内に止めおかれ、上陸したのは一月八日であった。

三月に、東京外国語大学ロシア語科の編入試験を受けて合格したが、経済上の理由で休学届を出し、地元の小学校の助教師になり、翌年中学校に

助教諭として転任した。昭和二十四年四月から教員と大学生の二足草鞋の綱渡りで、昭和二十八年三月卒業し、継続して教職にあり、昭和六十三年三月茨城県鹿嶋市立平井中学校長を最後に定年退職した。

紆余曲折の人生であったが、長男、長女、次女の三人とも独立して一家を成し、妻と二人の生活を続けている。孫四人、曾孫一人も健康である。七十二歳まで鹿嶋市の学校法人清真学園教頭や予

十一月二十日未明、私は亡き父の夢を見て目が覚めた。「これは釈放される前兆」と私は思った。正午に「イーシブチルパン、ソクパン（二十七番、釈放）」という声が聞こえ、看守にKGB室へ連れて行かれた。若いソ連軍中尉から「日本人は全員引揚げる。すぐに元山へ行け」と言われた。空は青く澄み渡り、太陽が燦々<sup>さんさん</sup>と輝いていた。

元山の収容所は満員とのことで、すぐ南の文坪の元住友軽金属会社の工員寮が収容所に指定され、私はそこで約一カ月を過ごし、十二月十八日に「栄

## 私の避難記

栃木県 緒方 ミヨ

備校のノーリツ学園中学校長を勤めた。現在は短歌の道に励み、平成十年には毎日歌壇賞を受賞する幸運にも恵まれ、悠悠自適の日々である。

昭和二十（一九四五）年八月のある夕方、母が「ミヨちゃん明日はお盆だね。お寿司を作ろうと思うけど、ミヨちゃん手伝ってね」いつもと変わらず母のおっとりとした優しい声でした。私も「ハイ、手伝います」それから布団に入りましたが、夜中三時の電話のベルで目が覚めました。父の声で「えっ！ いますぐですか？ はい分かりました」と電話は切れたのですが、それは今すぐに山へ逃げよ！という府庁からの電話だったのです。

私には何が何だか分かりませんでした。兄二人は軍人でしたので家にはおらず、私が一番年上なので、すぐ妹と弟を起こしました。何で山に逃げるのかも知らずに、とにかく山へ逃げるとの命令なのです。父も母も私たちも寝間着を着替え、防空ずきんをかぶり、防空壕へ入るときと同じく